

弓道ながの

第75号

発行：長野県弓道連盟
会長 外園公毅
〒399-4117
駒ヶ根市赤穂10214-4
TEL0265(83)5206
編集：県弓連
印刷：県成進社

巻頭言

思いつくままに

長野県弓道連盟副会長 山浦 博



新型コロナウイルス感染症が深刻な状況下、佐久市駒場公園弓道場を含む殆どの公共施設が四月十五日から五月

の末日までの一ヶ月半閉鎖されました。道場閉鎖前の私は、午前は弓道場、午後にはアトリエで絵筆を取るといふ心身共に充実した生活を送っていましたが、道場閉鎖が続いた五月の中頃から徐々に血圧が高くなり心配をした妻が親戚の医者者に相談をしたところ「運動不足」と「ストレス」が原因で問題はないとのことでした。が、その報告を受けるまで私は平静を保ってはいいたものの、内心穏やかではありませんでした。六月に入り公

共施設の閉鎖が解かれたその日、私は余程の事が無い限り、とにかく道場へ通うと決意し、稽古を再開しました。そして十日が過ぎた頃漸く血圧、体調共に正常に戻る兆しがあらわれ、その時は本当にほっとしました。しかし、毎日的と対峙していると今度は射込んだ矢数と同じ程の迷いが生じ悩まされることとなりました。しかしある時を境に却って射の迷いを楽しむことができるようになって、良い方法を得るため、そして考えた方法に工夫を加えた結果すばらしい一射となつて具現された一瞬弓士としてえも言われぬ喜びを感じました。

さて私の本多流との出会いですが、昭和五十四年三月、私の美術大学時代の親友に弓道を始めた事を話すと、早速彼の知人で国学院大学弓道部に所属し

数年前卒業した男性を紹介してくれました。直ぐに彼と連絡を取り上京、久々の新宿駅西口で待ち合わせその足で初めての明治神宮弓道場へ向かいました。弓道場には国学院大の他、東大、上智大、東京外語大など多くの学生が集まっていますその人数に驚き圧倒されました。混雑の中、昼の休憩を見計らってその会場で指導にあたっていた師範に私を紹介してくれました。その師範は、弓道を始めて間も無い素人同然の私に弓道八節、左右の手の内を弓道具を使いながら指導にあたってくれ、猶且つ弓道を修練する上での心構え、精神面を実に分かり易く丁寧に説明してくれました。その一言一句を聞き洩らすまいと必死にメモをとった記憶が今も鮮明に甦ります。

その時の人が本多流の川村自行先生で私が本多流に傾倒する切っ掛けとなった一人です。もう一人は、当事戸倉に住し、佐久の依田礼之助先生を訪ねられた折、私は偶然その場に居知り合い、その後、先生が群馬県に転居されるまでの数年間ご指導いただいたのが、柳原光春先生です。昭和五十六年、先生に誘われるまま生弓会の射初めに参加、以後十四年間生弓会会員として本多流に籍を置くこととなりました。そして、私は弓道教士の称号を授与された平成八



年の暮れ頃から次第に弓道への興味が薄れ、弓を持つのは顧問をしていた高校の道場で稀に的の前に立つぐらいいました。そんな時、既に退会して久しい本多流生弓会から一冊の本「本多流弓術書」が贈られて来ました。その本を通覧すると、ここ暫く気持ちが薄れ冷めつつあった弓道及び居合道への思いが今まで以上に強くなり居ても立つても居られない気持ちになりました。そして、その後の稽古は本多流弓術書を中心に、川村、柳原両先生の教えを基に「基本」に徹し頓矢数を掛け修練を積み日々となりました。昔、山内成豊先生が「弓道は基本があつて応用がない」居合の師井出廣正先生は「基本に徹し、工夫だとか応用は彼の世界へ行つてからだ」大学時代の糸東流空手の師木曾先生は「基本だ、基本が大事だ」が口癖でした。以上、私が心から師事した先生方の言葉を最後に記し終わりにしたいと思います。

特集

弓による神事

長野県弓道連盟顧問 百瀬 正

祭祀式典、競技、審査その他各種の射会の開催にあたり最初に行う射礼を矢渡という。矢渡は主催者または行事の責任者が行うことが通例になっている。屋内では主として坐射礼、屋外では立射礼を行う。射礼の種類は、坐射礼、立射礼、巻藁射は、

行っている。これらを思うと射礼は神事といえよう。

神事、祝いごとその他重要な儀式の際、矢渡の前に行う射礼で最上位の射手または権威者がつとめることになっている。射礼は昔から祭祀、式典その他晴れの場所において、その時代の式服を着用し、起居進退を礼法に従って射を行うものである。「射は、礼に始まって礼に終わる」といわれているように、時・所・位をわかきまえ、その動作は莊重優雅に、その心は純真清澄に、射と礼とが渾然融和して、一箭に誠をつくすことが弓道の本旨である。と弓道教本に書かれている。私は、射礼を行う時は、神様であるのと射手の心をつなぎ参加者全員が迷いなく弓が引けますよう大会が無事終わりますようお願いして

「慕目の儀」慕目の儀は、歩射第一の儀式で、各式の最初に行われるものです。慕目鏑という、朴の木または桐の木を削り抜いて中空にし、先に眼とよぶ穴を開けた長さ15cmほどに作られたものが先に付いている矢(鏑矢)を一本だけ射ます。中空の鏑に穴が空いていることから、矢を放つと風を切つて飛ぶとき空気が共鳴して「ピョウ」というような鋭い音が響きます。この音によって天地四方の魔性退散を祈念するものです。慕目には次のようなものがあります。誕生の慕目 懐胎五ヶ月目に帯の祝いとして行うもの。屋越の慕目 神社仏閣の新築、上棟、道場開き、病魔退散などを

祈って行います。厳密な儀式であり小笠原流では極秘伝であり、人を遠ざけて行われたもので、できることなら夜中に行い、もし昼間なら幕を張ってその中で行うべきであり、みだりに人の見物に供するときには心得千万の事である。

「大的式」大的式は、歩射礼の射中最も基本的なものであり且つ正式なものである。一口に大的式と言ってもその中には百手式、弓始、奉射などがある。

淵源するもので、源頼朝が文治五年(一一八九年)に鎌倉で行ったのが最初の弓始と言える。以来例年これを行い足利幕府も亦これを継承したが、戦国の乱世に遭って式が絶えてしまった。後に徳川八代將軍吉宗が再興し、幕末まで引き続いて行われた。今日行われているのはこの式である。その他草鹿、丸物、小串、振々等がある。何れも古来の方式通り行うものであり厳重に式を守り、勝手に変更するべきではない。古式に無いものを行うなら行わぬ方が良い。



廣澤寺 上棟式



代々伝わる漆塗りの半弓「枕弓」 9歳の頃 父・豊と

「流祖小笠原長清公」源氏六人の一人として信濃守に任ぜられた加賀美二郎遠光は、高倉天皇の承安四(一一七四)年正月、京都の宮中、紫宸殿上に怪しい光があらわれた時、召しだされて弓矢の威徳でこれをはらった功績により「王」の字の家紋を高倉天皇よりたまわった。その子長清、幼名を加賀美小二郎といっていたが、元服したときに高倉帝から「小笠原」姓をたまわった。このときから小笠原姓がはじまったわけである。以来九百年三十一世小笠原清忠先生まで続いている。

百瀬家葵弓道場初代助一郎翁は、旧松本藩弓術師範尾州竹林派吉田昌智先生門下であったが、先生の推挙により長男清が、小笠原流一張弓大日本武徳会主席範士窪田藤信先生に師事、この時の宗家は二十八世清務先生、父豊は同じく重藤弓全日本弓道連盟範士十段窪田真太郎先生に師事、この時の宗家二十九世清明先生より「當流歩射々礼基本」手書の巻物で射技射法基本体すべてが書かれている。



5歳の頃

最後に昭和二十七年四月吉日相傳候也 六孫王経基九代後胤小笠原長清二十九世孫 小笠原碩齋源清明 百瀬豊殿 同年十二月七日逝去。巻物は現在家宝として私が相続している。私は重藤弓範士八段窪田史郎先生に師事、宗家三十世清信先生より相位弓を許されている。七歳の時には国宝松本城復元記念大的式幣振役を二時間に亘り正座で相務めたのが始めて大的式に八回、藁目射手を八回務めてきました。葵弓道場四代目としてこれからも弓と神事に係りながら小笠原流が平和の弓として誕生した地、此処信濃の国、国宝松本城と共に葵弓道場が、七歳から弓を始めた孫の陽人が引き継いでくれればと思っております。

合掌

弓道合宿予約随時受付中！

野辺山洗心弓道場

近的道場 18人立1ヶ所 (床暖房完備)
12人立2ヶ所
遠的道場 1ヶ所

帝産ロッチ

〒384-1305

長野県南佐久郡南牧村野辺山1003

HP : <http://www.teisanlodge.com/>

ご予約・お問い合わせは 0267-98-2861

県高校総体代替大会

新型コロナウイルスの影響により、史上初となった全国高校総体の中止を受け、本大会を最後に引退となる高校三年生を対象とし、県内三地区で県高校総体代替大会が開催されました。

参加した三年生は、この大会を部活動の締めくくりの場とし、三年間の練習の成果を発揮しました。

県高校総体代替大会

駒ヶ根工業高等学校三年 酒井隼人

コロナ禍の中、出場選手は三年生限定、無観客という条件で長野県高等学校総合体育代替大会弓道競技が開催されました。三年生最後となるこの大会で優勝できたことを嬉しく思っています。今回はコロナ禍で大会に向けてどのような取り組み方をしてきたかについて書いていきます。コロナウイルスが流行してから学校は四月五月と休校になってしまいました。当然あると思っていた地区大会の開催も危ぶまれ、さらには部活動の停止や伊那市の武道館も一時閉館となってしまい、弓が引けない状態になり、すっかり気持ち減ってしまいました。そうし

て六月に入り部活動も再開し、前述した代替大会が開催される知らせも届きました。二カ月の間弓を引いていなかったせいもあってか的中も落ち、モチベーションは全く上がらず部活動自体もサボりがちになりました。そんな中私の背中を押してくれたのが友人や弓道仲間、そして後輩の存在でした。友人達に自分の現状について話をする、と、同情的な内容の言葉ではなく、「お前ならできるよ」といった励ましの言葉をくれました。後輩達は練習中の記録とりにやってくれました。仲間の励ましもあって私は立ち直る事ができました。その頃には大会二週間前です。このままでは間に合わないと考え練習方法をガラッと変えました。主に二つの点を変えました。まず一つ目は朝練



塩尻会場の様子

習に行かない事。私自身朝に弱い事もあり、無理をして引かない事にしました。二つ目は一日に引く矢数をあえて少なくする事。かわりに一本一本どこにどう飛んだかを書いて変な癖を無くしていきました。そして迎えた大会当日、練習の成果が出て優勝する事ができました。練習の取り組み方を変えて本当に良かったなと思いました。コロナ禍で大会までの期間が短かったからこそ工夫して練習する力が身につきました。こういった事を今後の弓道人生に活かしていきたいです。

各地の代替大会結果

長野会場(東北信)

長野運動公園運動場弓道場
参加人数・男子54名、女子80名

▲男子個人の部(8射)

- 1位 田口 維吹(長野日大)
- 2位 鈴木 恵太(長野南)
- 3位 石坂 陽(長野工業)
- 4位 南澤 由卓(上田)
- 5位 上野 優(上田千曲)

▲女子個人の部(8射)

- 1位 依田 彩花(上田染谷丘)
- 2位 柴本 彩葉(中野西)
- 3位 中澤 真帆(岩村田)
- 4位 戸澤 凜(須坂東)
- 5位 角田 真歩(野沢北)

塩尻会場(中信)

塩尻市弓道場

参加人数・男子47名、女子47名

▲男子個人の部(8射)

- 1位 代田 大地(志学館)
- 2位 三浦 颯悟(松商学園)
- 3位 原田 涼汰(明科)

▲女子個人の部(8射)

- 1位 窪田 亜矢加(明科)
- 2位 竹内 晴南(穂高商業)
- 3位 大野 桜季(松商学園)

飯田会場(南信)

県営飯田弓道場

参加人数・男子43名、女子47名

▲男子個人の部(8射)

- 1位 酒井 隼人(駒ヶ根工業)
- 2位 濱 直樹(岡谷南)
- 3位 矢澤 俊輝(飯田風越)

▲女子個人の部(8射)

- 1位 赤須 智羽(伊那西)
- 2位 橋爪 彩花(赤穂)
- 3位 岡村 芽依(岡谷工業)

インターハイ代替大会を終えて

伊那西高等学校三年 赤須 智羽

私が弓道を始めたのは高校一年生の時です。当時は、弓を引いている先輩方に憧れ、追いつこうとひたすら稽古をしていました。二年生になってからメンバーに入ることができ、先輩方と一緒に多くの大会に出たり、弓を引く以外のさまざまな経験を積んだりしました。その時から私の目標は、大好きなクラブ員や先生と共に夢舞台である全国大会へ出場することでした。その舞台に立つために厳しい冬の稽古をしている最中、新型コロナウイルスが流行りだしました。猛威をふるったウイルスは、三年生にとつての高校生活最後の大会や審査会を奪い、学校生活にも大きな打撃を与えました。

休校期間中弓に触れられないということでは不安が積もる一方でしたが、悪いことばかりではありませんでした。それは、当たり前に行っていたクラブ活動や大会は当たり前ではない、ということに気付かされたことでした。そして改めて弓を引けることは、周りの人々のお陰であると感謝の気持ちが湧いてきました。

そして、今回、各校の先生方や長野県弓道連盟の方々が生徒のために最後の大会を用意して下さいました。参

加人数も少なく、無観客ということでもいつもと違った雰囲気の中でしたが、今までやってきたことを信じて弓を引きました。

試合を終え、賞状を頂きました。賞状には私の名前が書いてありましたが、私一人のものではなく、今まで共に戦ってきたクラブ員全員のものです。そんな賞状を学校に持ち帰って行くことができ、本当に嬉しく思いました。全国大会に立つことはできませんでしたが、最後に、大好きなクラブ員と共に弓を引けた今大会こそ夢舞台でした。

弓道は一生続けられるスポーツです。私も、大好きな弓道の一つの生きがいとして、一生続けていこうと思います。



コロナ禍の高校弓道

長野県弓道連盟ジュニア部長

中山 光康

一月には対岸の火事と思っていた新型コロナウイルスがあつたという間に身近な危機となった春には、今まで経験したことのない長い部活動の停止、大会の中止が相次ぎました。先の予定が無くなる、先の見通しがたかないという大変な春でした。

今回、三年生諸君に何とか最後の大会の機会をとということ、7月末という遅い時期に、また例年に比べ不十分な形ではありましたが、代替大会を開催することができました。昨年度の部員数から考えると半分前後の参加者であったと思われすが、八射皆中の選手が出たりと高いレベルの大会ができたと思います。

さて、三年生諸君には最後のまじめの時期がこのようになってしまいが残念でしたが、高校のクラブ活動はどうだったでしょうか？ 長野県では多くの人が高校になって初めて弓に触れます。最初はできなかった弓を引けたり、涙まで矢がとどいたり、中つたり、頑張ればできるという経

験も多く体験できたことと思いません。逆にちよつとしたことで不振に陥ったり、緊張、不安など心の問題も多く体験したのではないのでしょうか。多くの経験をこれからの人生の中で生かしていつて欲しいと考えています。

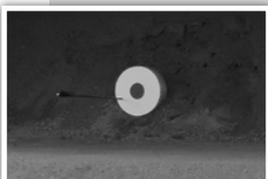
弓道の教歌に「この秋は 水か嵐か知らねども ただひたすらに田の草を取る」というものがあります。お米を取るにも収穫の時期に天災に見舞われれば今までの苦労が水の泡となるかもしれない、でも収穫を得なければ先のことを憂うのでなく今の作業、今やるべきことを黙々とやるしかないということ、まだ今後の大会についても見通しを持ってない状況ですが、一、二年生は今やれる練習に精一杯取り組んでください。また、三年生諸君はこれで一区切り、進路に向けて全力を傾ける時です。それぞれ良い結果が得られること祈念いたします。最後に、弓道はいつまでもできるものです。すぐ続けない諸君も何年、何十年後でも機会があれば、ぜひまた弓道を再開してもらえたらと思います。

団体近的

- 優勝 佐久支部 清水北登、平塚祐介、塚田滉巳、小山義弘、篠澤英次
- 2位 飯伊支部 伊藤千昭、中村健二、井原寿恵、松枝敏広、平澤敏弘
- 3位 上伊那支部 蟹澤契太、保科良介、馬場絢音、白田岳大、蟹澤史弥
- 4位 安曇支部 渡辺晃、牛越和枝、猿田功一、藤澤一樹、松井幸彦
- 5位 松本支部 大山綾、岩垂暁子、神通川浩一、小越剛、山崎征樹

団体遠的

- 優勝 上伊那支部 蟹澤契太、保科良介、蟹澤史弥
- 2位 松本支部 岩垂暁子、山崎征樹、上條寛
- 3位 飯伊支部 井原寿恵、中村健二、平澤敏弘
- 4位 塩尻支部 宮原勝広、本道啓行、伊藤公二
- 5位 安曇支部 渡辺晃、松尾滯、松井幸彦



マスク姿も
コロナならではの...

令和2年度 長野県 弓道支部対抗競技会

於：県営飯田弓道場

個人近的

- 優勝 白田 岳大(上伊那支部)
- 2位 神通川浩一(松本支部)
- 3位 塚田 滉巳(佐久支部)

個人遠的

- 優勝 永藤 聡(須高支部)
- 2位 蟹澤 契太(上伊那支部)
- 3位 清水 北登(佐久支部)



コロナ対策



教士号の伝達



弓仲間紹介

飯山弓道会 小林 綾

飯山弓道会の拠点、飯山市弓道場は平成五年に城山公園内の現在の場所に建てられたそうです。

城跡の石垣と桜に囲まれた十人立ちの道場で、夏は暑く冬は寒く、四季の移ろいをつぶさに感じ取ることがができます。



春にはソメイヨシノや枝垂桜がそここちに咲き、城山では市主催のさくらまつりなるものが開催されます。私が弓に興味を持つきっかけとなったのはお花見帰りに偶然目にしたN福先生とO田切先生の練習風景でしたが、ぼかぼか陽気のなか伸び伸びと弓をひくお二人の姿は、なんとも気持ちよさそうに見えたものです。

思い切つて声をかけさせていたのだと、近々初級教室があるので参加してみてくださいとのことでした。せつかくだから少しだけのぞいてみようかな、と一日限りの体験入学と勘違いして(実は全二十回)軽い気持ちで参加しました。

初めて触れる弓の世界は知らないことの連続で戸惑うことも多かったのですが、根気よく教えてくださる初級教室の先生方のもと、おぼつかないながらも毎回少しずつできることが増えていくのはうれしかったです。とてもそんなに通えないだろうな、と思っていたのに気付けば二十回すべて出席、そしてそのまま入会となりました。

なかなか思うようにいかず悩むこともありましたが、先生方や先輩方に支えられなんとかあきらめずに稽古を続けることができています。その都度親身になって指導して下さる皆さんや弓を続けられる環境など、全てのことに感謝の気持ちを忘れずに、これからも日々の稽古に励んでいきたいと思えます。

大会結果

みなみ信州弓道大会

○令和2年8月2日(日)

県営飯田弓道場

参加人数：高校5名、一般37名

合計42名

■個人の部

- 1位 岩村 拓生(松川) 19中
- 2位 井原 寿恵(豊丘) 17中
- 3位 松枝 敏弘(喬木) 17中
- 4位 平澤 敏弘(高森) 16中
- 5位 藤澤 敏子(上郷) 15中

■団体の部

- 1位 常盤 三男(松尾) 20中
- 2位 原 優介(松川) 20中
- 松枝 敏弘(喬木)
- 下平 春夫(上郷)
- 北原久美子(下久堅)
- 久保田太志(下條)
- 3位 原 富子(上飯田) 20中
- 亀谷 静江(上飯田) 16.4中



ちゅぷん

開催が危ぶまれた令和二年度支部対抗競技会が、予定通りに行われた。「はじめ!!」声が響く。広報のカメラを構え、そうそうこれこれ。性別も年齢も関係が無く向かうひたむきな瞳。私はこれに逢いたかった。場内に響く号令、的を射抜く音、弦音。久しぶりの目の前の光景に改めて感動を覚え、素直に大会の開催が嬉しく、高揚感があった。

前号の「弓道なごの」の編集は、とにかく原稿が無い!という状態で大変?いや簡単:いいえ、簡潔になった。休刊も致し方なしかというときに「広報紙は記録に残す役割がある。例えばページを減らしても発行するべき」の会長からの言葉で、異例の6ページでの発行となった。異例尽くしのこの大会も、とにかくこの瞬間を写真に収め、一枚でも多く紙面に載せ記録しようと思う。

大会後「コロナ禍の中なので参加した全選手、役員、運営委員にこの後一人も感染者が出ないことを祈りつつ」地元の人々からこの言葉を伺い、ハッとされた。本当にそう。感染拡大に配慮して参加を見合わせた支部もある中での全県あげての大会開催。競技部長・部員はじめ、地元の方々の皆さん、運営に携わった全ての方々、その心労はいかばかりであったか:

実は今回の「ひとりごと」は別の原稿を用意してあった。素直に感じた感動や喜び、感謝の気持ち:なんだかそのごたごたした、でもとても真面目な気持ちでどうしても書いておきたくなって原稿の差し替えをした。臨場感が少しでも紙面を通じて伝わることを願いつつ:これもこのコロナ禍の記録かなあ、などとこじつけている。

松本支部 中田美千